



福岡県の 工芸品

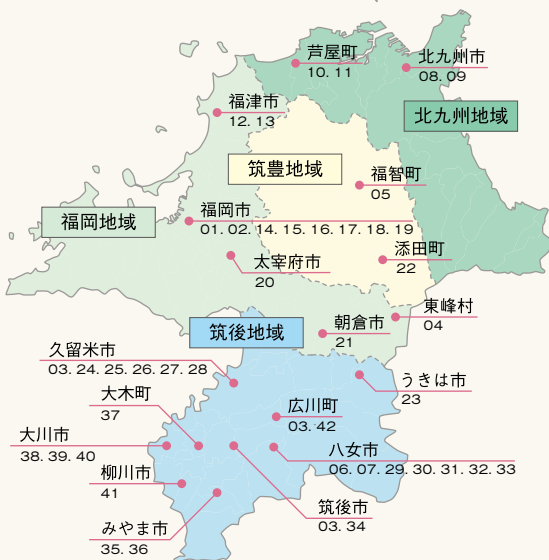
CRAFTS in
FUKUOKA



福岡県
Fukuoka Prefecture

伝統工芸はやみマップ

[主な生産地を示しています]



01 博多織	22 英彦山がらがら
02 博多人形	23 棕櫚箒
03 久留米餅	24 久留米おきあげ
04 小石原焼	25 籃胎漆器
05 上野焼	26 城島鬼瓦
06 八女福島仏壇	27 筑後和傘
07 八女提灯	28 鍋島緞通
08 孫次風	29 八女手漉和紙
09 小倉織	30 八女石灯ろう
10 八朔の馬	31 八女竹細工
11 芦屋釜	32 八女矢
12 津屋崎人形	33 八女和ごま
13 福岡積層工芸ガラス	34 赤坂人形
14 博多曲物	35 きじ車
15 博多鉢	36 天然樟脳
16 博多張子	37 掛川
17 博多独楽	38 大川総桐箆筥
18 博多おきあげ	39 大川彫刻
19 今宿人形	40 大川組子
20 木うそ	41 柳川まり
21 杷木五月節句幟	42 八女すだれ

はじめに

海、山、河などの豊かな自然に恵まれ、古くからアジアをはじめとする海外諸国との対外交流の玄関口として発展してきた福岡県。福岡県には、そのような風土や歴史的背景から生まれた多彩な工芸品が数多くあります。それらは、長い時間、受け継がれてきた技術、製法、変わらない原材料、独自の道具といった伝統を大切にしながらも、時代と共に、変わりゆくライフスタイルに順応しながら進化を遂げてきました。このパンフレットでは、今なお、私たちの暮らしを豊かに彩り続ける福岡県の工芸品を紹介いたします。

このパンフレットが、福岡県の工芸品を知っていただくきっかけとなり、そしてもっと愛していただくための一助になれば幸いです。

目次

- 04—19 経済産業大臣指定伝統的工芸品
経済産業大臣によって指定された7品目を紹介します。
- 20—39 福岡県知事指定特産民工芸品
福岡県知事によって指定された35品目を紹介します。
- 40—41 お問い合わせリスト

伝統的工芸品 経済産業大臣指定

解説

この指定は、経済産業大臣によって定められた要件（主として日常生活で使用、主要工程が手作り、百年以上前から続く技術や技法など）を持つ工芸品に与えられます。

福岡県内では7品目がこの指定を受け、伝統にふさわしい完成度の維持に努めています。

掲載一覧（全7品目）

- 06—07 博多織
- 08—09 博多人形
- 10—11 久留米餅
- 12—13 小石原焼
- 14—15 上野焼
- 16—17 八女福島仏壇
- 18—19 八女提灯

780年の歴史を持つ福岡県屈指の伝統工芸品

博多織

[はかたおり／福岡市ほか]



今から約780年前、一人の僧と若い博多商人、満田彌三右衛門が宋へ旅立ち、織物の技法を習得、帰国して代々受け継がれたのが始まりです。さらにその250年後、彌三右衛門の子孫、彦三郎が再び明へと渡り、織物の技法を研究。帰国後は工法の改良を重ね、琥珀織のように生地が厚く、浮線紋や柳条などの模様の浮きでた厚地の織物を作り出しました。そしてその織物が作られたこの土地、博多の地名から「博多織」と名づけられたと伝えられています。

・博多織工業組合 TEL：092-409-5162



【博多織の用途】

博多織は現在、さまざまな製品に使用されていますが、その代表格はやはり今も昔も帯です。特に「朝締めても夕方まで緩まない」と評された男帯は、丹念かつ頑丈に織り込まれる絹糸の博多織の特性を最大限に活かした逸品です。

博多祇園山笠では毎年、法被に男帯を締めた勇壮な男達の姿を見る事ができます。その質実剛健さは、博多の人々に今も流れる精神とともに愛され続けています。

HAKATA JAPAN

「HAKATA JAPAN」は、博多織の伝統と現代的ファッション感覚を融合して生まれたブランドです。バッグ、靴、小物など、さまざまな商品に生まれ変わった博多織は、国内はもちろん、海外からも注目されています。平成18年からは織の技術を若い世代に教える学校も開校して、後継者も育ち始めています。博多織は未来にも通用する文化なのです。



博多、そして日本の心を伝える究極の美

福岡だけでなく日本の「美」を代表する存在として国内外から高い評価を受ける博多人形。その歴史は古く、約800年前には既に素焼きの人形を愛でる習慣があったことが知られています。慶長5年(1600年)、黒田長政が筑前に入国した時代に招集した職人によって現在の下地がつけられ、江戸時代後半には名工たちの登場により、全国的に有名になりました。明治時代からは海外の需要も高まり、現在も100名近い作家が人形を製作し続けています。

・博多人形商工業協同組合 TEL: 092-291-4114



【人形のモチーフ】

「美人もの」「歌舞伎もの」「能もの」「童もの」「節句もの」などがあります。特に「美人もの」は人気が高く、写実的な表情、肌や着物の柔らかな曲線造形、彩色による美しさは、他の追隨を許しません。

人形の命—彩色と面相

「土ねり」「原型づくり」「型とり」「生地づくり」「焼成(窯での素焼き)を経て、「彩色」「面相」という重要な作業に入ります。約900度の温度で焼かれた人形に、胡粉やニカワの水溶液などで肌の部分を塗る「艶びき」と呼ばれる下準備をします。そして素焼きならではの素朴な面を活かしながら、工房では人形師が人形ひとつひとつに彩色を施していきます。また、特に重要な部分である顔への筆入れは「面相」と呼ばれ、「口紅入れ」「目入れ」「眉毛描き」などの入念な筆を入れることで、博多人形は新しい命を吹き込まれていきます。



博多人形



[はかたにんぎょう／福岡市ほか]

筑後川の豊かさが生んだ、絣文化の代表格

江戸時代、筑後川の肥沃な沿岸一帯で作付けされていた綿花。木綿の糸を麻で括り、藍染めして斑模様をつくり、別の染めパターンの糸を縦横に織り合わせることでさまざまな布面を生み出す「久留米絣」。江戸後期に久留米の米屋の娘だった井上伝が生み出し、発展に尽力したその技術は、県産品の枠を超え、日本の絣文化の代表格として人々に愛され続けています。図案づくり、括り、染め、織りなど 30 以上の高度な技術の工程を経て生まれる、重厚な質感が魅力です。



・久留米絣協同組合 TEL：0942-44-3701

【進化する久留米絣】

久留米絣はフランス・パリでの見本市出品など、海外にも積極的にその魅力を紹介しています。最先端の服飾デザイナーが手がけた久留米絣の品々は、日本文化への関心の高さもあって海外の方々にも好意的に迎えられています。

久留米絣



[くるめかすり／久留米市、筑後市、広川町ほか]

質を左右する作業一手括り

約 30 の工程を必要とする久留米絣ですが、多くの工程を左右するのは、やはり最初の染める部分を決める工程です。パターンやデザインを決定する絵紙では、その図案により経糸と緯糸の本数が決まります。次にこの絵紙を基本にして見本の糸をつくり（絵糸書き）、別工程で準備した糸に、そのパターンにそって麻などの縄で防染する（染めない）部分を強く括ります。



小石原焼

[こいしわらやき／東峰村]



質実剛健、素朴を極めた『用の美』

水ガメや大壺など、地元の農家が日常の必需品を窯で焼く焼物の文化があった小石原（東峰村）地方。天和2年（1682年）、福岡藩黒田家三代藩主光之が肥前伊万里の陶工を招き、中野焼の磁器の文化が伝えられることで「小石原焼」の基礎が完成しました。昭和6年には民芸運動の始祖・柳宗悦が紹介したことでその価値が見直され、さらに全国的に知られるようになりました。昭和30年代の民芸・陶芸ブーム以降は、多くの人々に愛される県産品の代表格になりました。しかし未だに質実剛健の素朴な風情は失われておらず、そこに小石原焼の魅力があります。



・小石原焼陶器協同組合 TEL：0946-74-2266

【小石原焼の特徴】

「生がけ」と呼ばれる素焼きをせず素地に直接釉薬をかけて焼き上げる技術により、焼物本来の手触り、素朴で温かい質感を出します。装飾も「とびかな」^{はひけ}「刷毛目」「櫛目」「指がき」「流し掛け」「うち掛け」など独自のパターンや技法があります。

生活の中で生まれた道具と技

小石原焼の装飾には、普通の生活の中から生まれた技が活きています。「指がき」と呼ばれる滑らかな曲線を器に化粧土で直に描く伝統的な技法や、器の大きさを測る「トンボ」、櫛や刷毛、カンナや鉄片などの道具も、すべて陶芸師が試作を重ねて作ります。

それらはみな、素朴な生活の中の知恵に基づいたものです。特別なものではなく手作りの良さを大切に、普段使うことで魅力が理解できるという“用の美”の心。それは、現在も陶芸師の技の中に息づいています。



上野焼

[あがのやき／福智町]



400年受け継がれた茶人の『粋』

1602年、豊前小倉藩主・細川忠興が李朝陶工・尊楷を招き、陶土と清流、燃料の松が豊富な福智山の麓・上野の地に開窯したのが始まりとされる上野焼。細川家、小笠原家にわたる藩主の御用窯として珍重された国焼茶陶で、江戸時代には遠州七窯の一つに選ばれるほど茶人に好まれていました。現在では約20軒の窯元が長い伝統から生まれた多彩な技法を受け継ぎ、独自の美しさや気品をもった表現を更に極めるために、腕を磨き続けています。



・上野焼協同組合 TEL：0947-28-5864

【上野焼の魅力】

上野焼の美意識は「薄づくり」に集約されています。重くないが軽すぎない。程よい重量と質感は、手に馴染む心地良い存在感を与えます。また「緑青流し」に代表される釉薬の豊かな色使いも特徴のひとつです。


気品を支える素材

上野焼の薄づくりの『命』は、土づくりです。不純物を取り除いた土は、水に浸して灰汁を抜き、布に包んで時間をかけて水を抜いた後、倉で数ヶ月間寝かせます。生き物である土は長い月日と丹精を込めて、焼き物に適した状態に仕上げられます。特に薄づくりには、釉薬の溶ける高温でも対応できる土が求められます。

また釉薬も最初期は藁やススキから生成される灰釉が主流でしたが、現在は銅や鉄を混ぜたものも使われます。同じ素材、同じ釉薬でも焼きあげる温度や窯中の空気量により、器それぞれが異なった個性や表情を持ちます。そんなところに上野焼の深さ、美しさがあるのです。



篤い信仰心が生んだ、荘厳かつ華麗な仏壇の世界

八女福島仏壇 

[やめふくしまぶつだん/八女市ほか]

重厚な漆塗り、華麗な金箔や蒔絵、精巧な宮殿や彫刻、金具細工など、職人の技の粋と贅の極みを施した八女福島仏壇。荘厳かつ華麗なたたずまいは、極楽浄土を思わせる迫力があります。そのルーツは江戸時代後期にまでさかのぼり、ある大工が夢見た壮麗な仏壇を仲間とともに再現したものだと言われています。その後、江戸時代末期には九州の仏壇製造の基礎となる技術が確立され、明治時代には産業にまで発展します。その伝統を今なお守り伝えつづける「筑後の誇り」、それが八女福島仏壇です。

・八女福島仏壇仏具協同組合 TEL：0943-24-3941



【仏壇の種類と魅力】

仏壇下段が階段状のものを「福島型」、引き出しや棚付きのものを「八女型」と呼びます。最高の職人「技」と、檜や紅松、純金箔や本漆などの「贅」を尽くす仏壇の技術は、祈る人々の尊い信仰心を表すものです。

筑後職人の技術の「粋」の集合体

仏壇の製造は完全分業制です。木地師、宮殿師、彫刻師、金具師、蒔絵師などが約80以上の工程をこなします。

仏壇の中にある屋根や柱の細やかな部分を作る宮殿師、仏壇上部を飾る鳥や花などの図柄を一枚の板に彫る彫刻師、そして彫刻に箔押し用の漆を塗り、金箔を乗せ重厚な仕上がりにしていく塗師や蒔絵師の工程など、どれひとつとして欠かすことのできない作業がほぼ手作業で行われていきます。

日々の鍛錬の中で培われる珠玉の技が、八女福島仏壇を生み出していくのです。



筑後の恵みが産んだ、幽玄の美

八女提灯



[やめちょうちん／八女市ほか]

八女地方の竹や、澄んだ水から生まれた和紙、絹などを素材にして誕生した八女提灯。筑後のお盆や祭の風物詩であるだけでなく、文化の粋を集めた逸品でもあります。江戸時代、文化年間(約210年前)ごろに福島町(今の八女市)で生まれた素朴な「場提灯」というものから始まり、安政年間(約160年前)には、吉永太平により一条螺旋の製法、薄い手漉き和紙の導入などその基礎が築かれます。その後も多くの先達・名匠たちの手によって明治、大正と進化を続けました。



・八女提灯協同組合 TEL：0943-22-5161

【提灯の種類】

地元で伝統的に伝わる長い筒の形をした「住吉」や、吊り提灯「御殿丸」などがありますが、現在では「行灯」が最も一般的です。八女生産の約8割がお盆用ですが、祭提灯や神社用の提灯なども生産しています。

提灯づくりの技 — 「張り付け」と「絵付け」

八女では毎年6、7月が作業の最盛期で、生産は「ひご巻き」「張り付け」「絵付け」などの工程が分業で行われます。

張り付けは、現在では絹が主流です。張り付けた絹を剃刀などで裁断する作業、その絹の上に「ドウサ」を塗る作業は熟練と繊細さを必要とします。

「絵付け」作業も生産性を向上させるため「速画」という独自の技法が発達しました。筆絵師は、既に頭の中に入れた絵の構図を基に、一度に10以上の火袋に下絵無してひとつひとつ細かく筆を入れていきます。

筑後の職人の心意気が、ここにも息づいています。



福岡県知事指定 特産民工芸品

解説

この指定は、福岡県で製造される郷土色が豊かで、しかも一定の伝統性を有する(技術・技法が50年以上の歴史があることなど)工芸品・民芸品に与えられます。

現在、35品目が指定され、福岡県内のみならず、日本中の人々に愛されています。

掲載一覧(全35品目)

- 22 孫次風、小倉織
- 23 八朔の馬、芦屋釜
- 24 津屋崎人形、福岡積層工芸ガラス
- 25 博多曲物、博多鋏
- 26 博多張子、博多独楽
- 27 博多おきあげ、今宿人形
- 28 木うそ、杷木五月節句幟
- 29 英彦山がらがら、棕櫚箒
- 30 久留米おきあげ、藍胎漆器
- 31 城島鬼瓦、筑後和傘
- 32 鍋島緞通、八女手漉和紙
- 33 八女石灯ろう、八女竹細工
- 34 八女矢、八女和ごま
- 35 赤坂人形、きじ車
- 36 天然樟脳、掛川
- 37 大川絵桐箆笥、大川彫刻
- 38 大川組子、柳川まり
- 39 八女すだれ

孫次風

[まごじだこ／北九州市]

地域の伝承を遊び心とともに

明治末期、戸畑に生まれた「孫次風」は、竹内孫次氏が作り始めたことにその名を由来します。北九州は海に近く風が強いため、風あげが盛んな地域で、風つくりの名人たちが、地域を代表するもの(門司のふぐ、若松のかっぱなど)、孫次風と同様に製作者の名前を冠したものなど、それぞれの凝った題材や形状で腕を競っていました。孫次風の主題となっているセミは、「つくつくぼうし」といわれます。



・ K I T E H O U S E まごじ (竹内義博) TEL : 093-881-4537

八朔の馬

[はっさくのうま／芦屋町]

次世代の健勝を願う、素朴な贈り物

「八朔の馬」とは、男の子の「八朔(旧暦8月1日)」の初節句に、祝いとして近隣住民に配るものです。300年の歴史を持つこの祝いの行事は、現在も新暦9月2日の早朝に行われています。馬の背中には黒田長政などの名武将を乗せ、「元気で勇壮に育つように」と作られていて、今も人々に愛され続けています。八朔の馬は、地元の藁で作ります。藁を濡らし、木の台で叩いて柔らかくし、編み込んで形を作ります。



・ 筑前芦屋だごび一なとわら馬の会事務局 TEL : 093-221-1001

小倉織

[こくらおり／北九州市ほか]

江戸時代から愛された木綿織物

「小倉織」は、地厚で丈夫、なめらかな木綿の織物です。先染めした糸を用いて、経糸が緯糸より密になるように織ることで表現される縞模様は、凜として潔く、色の濃淡による立体的な世界を創りだします。

江戸初期から袴や帯、羽織として用いられ、徳川家康が鷹狩の際の羽織として愛用したという記録も残る小倉織は、昭和初期に一度途絶えましたが、同59年、復元・再生しました。現在は、国内外で好評を博し、次世代の作り手も育っています。



・ 小倉織協同組合 TEL : 093-561-0505

芦屋釜

[あしやがま／芦屋町]

文様と形之美、古来茶人に愛された茶の湯釜が現代に

「芦屋釜」は南北朝時代頃から、筑前国芦屋津(現在の福岡県遠賀郡芦屋町)で製作された鑄鉄製の茶の湯釜です。「真形」とよばれる端正な形と、胴部に表される優美な文様が特徴で、古くから茶の湯釜の名品として珍重されています。

その製作は江戸時代初期頃に一旦途絶えますが、平成になって芦屋釜の調査・研究、復元製作が進められました。現在では、鑄物師達によって、再び芦屋釜の製作が行われています。



・ 芦屋釜の里 TEL : 093-223-5881

津屋崎人形

[つやぎきにんぎょう／福津市]

「素朴さ」と「重厚さ」で愛される人形

約 230 年の歴史を持つ素朴な素焼きの人形、津屋崎人形。古くから職人の家に代々伝わる土や石膏の「二枚型」の手押し製法で作られており、重厚な安定感に魅力があります。また彩色も、顔料を水とニカワで調合したもので施すため、鮮やかで力強いという特徴があります。人形は大型のもの、時代を反映した「民俗人形」、そして縁起が良いとされるフクロウの形をした優しい音色の「モマ笛」などがよく知られています。



・津屋崎人形振興組合 TEL : 0940-52-0419

博多曲物

[はかたまげもの／福岡市]

日本人が重用してきた生活道具

「博多曲物」は、日本人が古来より重宝してきた生活道具です。特にご飯のおひつとしては、無駄な水分を飛ばし適度な湿度を保つという特性があり、現代でも寿司職人はじめ多くの料理人に愛されています。使い方・片付け方次第では、50年にわたって使用が可能という、まさに理にかなった道具です。昭和初期、鉄道の開通とともに需要が増した弁当箱の生産によって広く使われるようになりました。



・柴田徳商店 TEL : 092-651-0470 ・博多曲物玉樹 TEL : 092-935-5056

福岡積層工芸ガラス

[ふくおかせきそうこうげいガラス／福津市ほか]

透き通り重なりあう美しさ

約 90 年前から製造されている「福岡積層工芸ガラス」は、「マルチイグラス (Multiple Layer Glass=多層積層硝子)」の名前で広く県民に親しまれている工芸品です。性質の異なる素材を何層にも重ねるのが特徴で、高い透明度、豊かな曲線、そして代々受け継がれる 130 種類もの鮮やかな色から生まれる装飾品や食器は、人々の目を楽しませてくれます。現在も最高の品質を目指して、職人が日々改良を重ねながら製作し、現在に至っています。



・有限会社マルチイグラス TEL : 0940-34-5370

博多鋏

[はかたばさみ／福岡市]

刀鍛冶に始まる伝統と技の集大成

「博多鋏」の歴史は、およそ 700 年。南宋から博多へ移り住んだ貿易商人・謝国明が、博多に持ち込んだ「唐鋏」に始まります。

かつては、幕府への献上品として、博多の刀鍛冶師たちの手によって造られました。鋭い切れ味の秘訣も、彼ら職人による刀づくりの製法に由来するものが多く、土台部分「地金」と刃部分「鋼」の鍛接など、そのこだわりが随所に見られます。



・高柳商店 TEL : 092-291-0613

博多張子

[はかたはりこ／福岡市ほか]

昔ながらの縁起物

江戸中期、上方の人形師によって伝えられ木製や石膏製の型に和紙などを幾重も重ねて成形される「博多張子」は、布苔（のり）によって貼り付け、天日干して乾燥させたり、その後に二つに割って型から取り出し、貼りあわせながら成型したりと、現在でも昔ながらの手の込んだ製法で作られています。ニカワで溶いた顔料で仕上げた色彩は色鮮やかで、虎やダルマなどを主題にした縁起物として親しまれています。



・中尾俊雄商店 TEL：092-325-0241

博多おきあげ

[はかたおきあげ／福岡市]

重なる布のぬくもりと美しさ 受け継がれる博多の押絵

おきあげとは、下絵を布や綿を使い立体的に盛り上げる押絵のこと。博多には女の子の誕生を祝しておきあげを贈る習慣がありました。博多おきあげの魅力は手描きの面相の繊細さと豊かさにあります。もともと、江戸時代に宮中の女官らによって作られており、幕末に、今の博多区須崎町（すさき）にいた画家・村田東圃の妻・千賀が博多の町に広めたといわれています。明治、大正時代には、博多の女性の教養の一つでした。現在は、清水親子によってその製法が継承されています。



・清水 清子 TEL：092-524-4477

博多独楽

[はかたこま／福岡市ほか]

曲芸を生んだ精巧なつくり

独楽の日本での歴史は、中国から子どもの玩具として竹製の唐ゴマが伝来した、およそ1300年前が始まりです。初めての日本発祥ゴマと言われる「博多独楽」の誕生は、17世紀後半。木台に鉄芯を打ち込む「心棒」をもっているのが特徴です。その「心棒」によって回転時のバランスが保ちやすく、少ない振りでよく廻るので、独楽自体の可能性を飛躍的に向上させ、「曲芸独楽」の文化を生み出す起源にもなりました。



・博多独楽保存会 TEL：092-409-4882

今宿人形

[いまじゆくにんぎょう／福岡市]

暮らしに密着した民俗人形 守り続ける型と伝統

博多人形の母体となった民俗土人形。明治38年に大橋清助が、今宿に節句人形工房「人清」を開いたのがはじまりです。

伝統的な生活文化や伝承文化、信仰など人々の暮らしに結びついたもの多く、代表的なものに、火災・盗難よけの「猿面」や「笹野才蔵」、「おたふく面」などがあります。素朴な中にも温かみのある今宿人形は、多くの人々に愛されました。

現在、清助と重雄が大切に使用してきた土型を引き継ぎ、重雄の姪が伝統を守り続けています。



・佐藤 由美子 TEL：092-863-0824

木うそ

[きうそ／太宰府市]

天神様の使い鳥

「木うそ」は、うそという小鳥が木に留まっている姿を表現しています。1591年、うその群れが太宰府天満宮造営の邪魔をしていた蜂の大群を退治したことから、天神様の使いの鳥と言われるようになりました。

木うその特長の羽根はノミの一刀彫で薄く幾十にもカールしています。また、1月7日の天満宮の神事「うそかえ」にも用いられ、幸運の守り神として親しまれています。



・太宰府木うそ保存会(太宰府市商工会内) TEL：092-922-4345

英彦山がらがら

[ひこさんがらがら／添田町]

生活を守り続ける日本最古の土鈴

修験道の地、英彦山の麓である添田町で生まれた「英彦山がらがら」は、国内でも最古の約800年の歴史を持つ土鈴で、素焼きならではの清楚なガラガラという音色が特徴です。文武天皇が英彦山に奉納した鈴が由来とされ、戦乱の際に土に埋めた鈴の複製を、参拝者に分けたのが起源とされています。現在でも家々の玄関や門前に飾られる魔よけとして、また田畑の水口に埋め、災害を避けるためのお守りとして重宝されています。



・篠崎嘉丈 TEL：0947-85-0169

杷木五月節句幟

[はきごがつせっくのぼり／朝倉市]

筑後の節句を飾る、勇壮な幟

江戸時代、端午の節句に飾られたことが起源といわれる五月節句幟。染めの鮮やかさと幟2本で1対となる勇壮さは、筑後地域の風物詩として地元の人々に親しまれています。特に朝倉(旧杷木町)地域は、筑後川の豊かな水が色染めの作業に適していたため、幟の生産が盛んになりました。現在では、室内に飾る小型のものが多くなりましたが、豊臣秀吉、加藤清正など武将の姿をあしらった華麗な幟は、今も男の子の逞しさを願う家々に飾られています。



・米山染工場 TEL：0946-62-0340

棕櫚箒

[しゅろほうき／うきは市]

日常に根ざした「生活用品」

「棕櫚箒」は、各家庭の軒先に植えられた棕櫚で作った箒として、およそ30年前までは、農家の休耕期の副業として、多くの地方で生産されていました。棕櫚の繊維質には埃を吸い付かせる機能があり、これで毎日床掃除をすると棕櫚の皮の油分がなじみ、自然と床につやが出てきます。

また長年にわたって使用できる丈夫さを兼ね備えているため、古くから親しまれています。現在でも大量生産や海外からの低単価の商品の波に押されながらも、生活用品として愛用されています。



・浮羽棕櫚箒保存会 TEL：0943-77-2212

久留米おきあげ

[くろめおきあげ/久留米市]

押し絵雛で知られる布の文化

おきあげとは鮮やかな布などに綿を入れ、ひとつひとつ重ねて作る「押し絵」のことです。特に羽子板や壁かけに見られる華やかな雛や歌舞伎役者などが代表的なものです。由来は諸説ありますが、有馬藩の参勤交代の際に土産として文化が持ち込まれたのではと言われています。明治、大正時代まで筑後一円で盛んに作られ、顔を描く「面目師」など専門の職人がいましたが、現在は主婦たちによってその製法が引き継がれています。



・福岡県商工部観光局 観光政策課 TEL：092-643-3454

城島鬼瓦

[じょうじまおにがわら/久留米市]

日本家屋の屋根を飾る、厳しい形相

城島の瓦づくりは、関ヶ原の戦い後、久留米藩主として入城した有馬氏により始まります。優美な光沢と格調高い姿形・耐久性には定評があり、九州各地の神社や仏閣・日本家屋などに使われ、知られるようになりました。屋根の端を飾る「鬼瓦」は、厳しい形相の鬼の顔はもちろん、雲や菊など、様々な形状を模した魔除けとして一家を守ります。



・城島鬼瓦組合(久留米南部商工会内) TEL：0942-64-3649

籃胎漆器

[らんたいしっき/久留米市]

丈夫で美しい日用品

籃胎とは、「竹かごを胎む(素地とする)」ことを意味します。その名のとおり、竹で編んだ器に漆をかけ、幾重にも研ぎ出して装飾加工を施し仕上げます。京都の名高い塗物師・勝月半兵衛を久留米藩に招いてつくった堅地塗の伝統を基礎とし、明治20年頃、茶人の豊福勝次、竹細工師の近藤幸七、塗師の川崎峰次郎の3人が力を合せて造り出したものだとされます。姿の美しさだけではなく、軽く丈夫で、使うほどに味わいを増すことから、長い年月に渡り、日常に用いる器として愛用されています。



・久留米籃胎漆器組合(地場産くろめ内) TEL：0942-44-3700

筑後和傘

[ちくごわがさ/久留米市ほか]

繊細な巧の技が生み出す美しさと実用性

「筑後和傘」は、複雑な100以上の工程からなる細工が施された美しさと実用性を兼ね備える工芸品です。17世紀初めに地元の日吉神社の神官が副業としたことが発祥とされ、柄や傘骨の材料となる真竹が筑後川経由で入手できたこと、和紙や柿渋の名産地が近かったこと、技術を持つ職人が多かったことなどを背景に、和傘の一大生産地となりました。昭和20年ごろ、町内に500人いたとされる職人も今は途絶え、地元・城島の伝統を残そうと発足した保存会により、技術が継承されています。



・城島和傘保存会 TEL：0942-62-1137

鍋島緞通

[なべしまだんつう／久留米市ほか]

日本の気候にふさわしい敷物

「鍋島緞通」は、元禄年間（約320年前）に古賀清右衛門が、中国からの技術を習得し「扇町毛氈」として織ったのがはじまりで、これが日本最古の綿緞通といわれています。海外の緞通が羊毛製であるのに対し、当時地元で多く採れていた木綿糸を使っていることが大きな特長で、高温多湿な日本の気候にふさわしい敷物として、その肌触りや使い込むほどに味わいを増す品質が多くの人々に愛されています。



・有限会社 鍋島緞通吉島家 TEL：0952-24-0778

八女石灯ろう

[やめいしとうろう／八女市]

凝灰岩ならではのおもむき

「八女石灯ろう」の特徴は、地元から多く産出される凝灰岩にあります。凝灰岩は、軽くて軟らかく風化しやすい石材で、細かい細工に向かない反面、寒さや熱に強く石苔を早くつけやすいなど、庭灯ろうに最も適した石質を持っています。江戸時代、この地域では石橋づくりなどに多くの石工が活躍し、それに伴って石灯ろうの生産も盛んになりました。



・八女石灯ろう協同組合（八女商工会議所内） TEL：0943-22-5161

八女手漉和紙

[やめてすきわし／八女市ほか]

耐久性に富んだ強靱な和紙

「八女手漉和紙」の起源は、九州で最も古く、400年以上前、越前の僧・日原上人が、矢部川の地理や水質が製紙に適しているのを見て、加工術を伝授したと言われます。大きな特徴は、この地方特有の長い繊維の楮を用いるために、他産地にはない強靱な和紙ができること。繊維が太く腰が強く、耐久性に富んでおり、掛軸、障子紙、ふすまの内張りなどの表装用の和紙として高い評価を受けています。



・八女手漉和紙組合 TEL：0943-22-3131

八女竹細工

[やめたけざいく／八女市ほか]

長く愛される実用品

八女地方は、赤土の粘性が高く、良質の真竹と孟宗竹に恵まれています。それらの竹を材料に作られる「八女竹細工」は、宝永年間（約310年前）に福岡藩と高鍋藩から技法が伝わり、やがてその技法がひとつに合わさって有馬藩の下級武士の副業として始まりました。特に縁巻きの仕上げの丁寧さが特徴で、巻きヒゴは一気に10m前後の薄いヒゴを作り、籠の縁にしっかり巻き付けます。染料も接着剤も使わないにもかかわらず、耐久性に優れ、5、60年は実用品として使用できる逸品です。



・八女伝統工芸館 TEL：0943-22-3131

八女矢

[やめや／八女市ほか]

矢飛びの良さと美しさ

八女に矢師が多いのは、矢作りに適した良質の篠竹が豊富であること、宝暦2年(1752年)に有馬藩お抱えの矢師が移り住んだことが理由とされます。竹を炭火で炙り、まっすぐに伸ばす「あらため」という技法、羽根のカットなど、すべて手作業で作られる「八女矢」。四本が一組みとなるため、長さ・重さ・節の位置・矢羽根がすべて均一に揃えられていることが基本です。最近では、本物の素材と技術を用いた装飾用のミニチュアなども作られ、好評を博しています。



・松延矢製作所 TEL：0943-22-4501

赤坂人形

[あかさか／にぎょう／筑後市]

素朴であたたかい土人形

「赤坂人形」は、江戸時代中期、有馬藩の御用窯として栄えた赤坂焼の産地で陶工たちの余技として作られました。愛称となっている「てっぽぽ」とは、筑後の古い方言で「不器用な人」を意味し、その名がしめすとおりの粗い素焼きの容姿は、型を合わせる際にはみ出した部分が残ったままで、彩色も簡単なものであり、素朴さがあふれています。



・野口紘一 TEL：0942-52-4217

八女和ごま

[やめわごま／八女市]

大きくてた「ヘソ」が特徴

「八女和ごま」の起源は、菅原道真公が伝えたというものなど諸説があります。上面の中央部分にある大きくくぼんだ「ヘソ」が特徴で、これは明治時代以前の形状からの名残りではないかと言われています。こま作りには、樹齢30年以上のまっすぐ伸びた木を、約1年を費やして乾燥させるなど、長期間の工程が必要です。

また、こまを長く、勢いよく回すためには、木の芯がこまの中心になっていることが大切であり、熟練の技が要求されます。



・隈本木工所 TEL：0943-22-2955

きじ車

[きじぐるま／みやま市]

九州を代表する木製の玩具

「きじ車」は、九州を代表する木製玩具で、素朴な中にかわいらしさをたたえます。開運や縁結び・家庭円満への「道案内」をすと伝えられ、北原白秋の詩に詠まれたことで、全国に知られるようになりました。乾燥させた松や桐を材料に、釘を使わずセン刀と呼ばれるナター一本で形を整え、絵付けが施されます。

なお、きじ車は北部九州の各地に、車輪の数やデザイン、「きじ馬」と称されるものなど、少しずつ異なる形態で伝えられています。



・清水きじ車保存会(みやま市環境経済部商工観光課内) TEL：0944-64-1523

天然樟脳

[てんねんしょうのう／みやま市]

森がくれたやさしい香り

樟脳は約400年前から製造されており、防虫剤や芳香剤として人々の暮らしを支えてきました。樟の原木を小さな木片にし、甑で蒸すことで発生する蒸気を冷やして結晶化させ、搾って固めることで樟脳が出来上がります。約6tもの樟から出来る樟脳はわずか25kgほど。最近では、製造過程で作られる樟脳油も、アロマオイルとして注目されています。合成樟脳の普及などにより一時は消えつつあった天然樟脳ですが、県内では唯一、みやま市の内野樟脳で守られ続けています。



・内野樟脳 TEL：0944-62-2985

大川総桐箆笥

[おおかわそうぎりたんす／大川市ほか]

桐の特性が活きた職人技

桐は、調湿や保湿効果・難燃性に加え、防虫効果もある高温多湿な日本の風土にあった木材です。「大川総桐箆笥」は、そんな桐の特性を最大限に活かした、木目の美しさが魅力の家具で、最上の柾目の厚板を用いた、緻密な職人技で作られています。引き出しの奥には、空気の抜け穴となるカラクリもあるなど、緻密さゆえの開け閉めの感触や桐が持つ肌触りの良さも好まれています。



・大川総桐箆笥振興会(大川インテリア振興センター内) TEL：0944-87-0035

掛川

[かけがわ／大木町ほか]

い草の爽やかな香りと過ごしやすい足触り

仏前用の敷物として使われる「掛川」は、い草の産地として知られる筑後一帯で古くから生産されてきました。い草特有の爽やかな香りと鮮やかな色彩には風格があり、折目目が詰まった独特の肌触りが人気です。掛川は、い草農家が多かった40年ほど前まで、大木町で生活している女性の内職として盛んに織られていましたが、今でも、筑後の夏の風物詩的な存在として、多くの家庭で愛用されています。



・福岡県花筵協同組合 TEL：0944-32-1010

大川彫刻

[おおかわちょうこく／大川市]

彫りの力強さと美しさ

「大川彫刻」は、薄物の屋久杉の板を使い、木目の繊細な線の美しさを生かすことで立体感を出す伝統の透かし彫りです。木を見極める職人の感性と、日々鍛錬を重ねた技術に裏付けされた逸品です。その技術は立花藩の立川流の流れを組み、江戸末期には神社仏閣の装飾品が多く作られました。昭和に入るところにその高い技術は一般化し、日本家屋の実用性と装飾性を兼ねた様式として重宝されています。



・大川ランマ彫刻振興会(大川インテリア振興センター内) TEL：0944-87-0035

大川組子

[おおかわくみこ／大川市]

緻密な細工が描く木の紋様

「大川組子」は、約 300 年の歴史を誇る美しさと緻密さを兼ね備えた工芸品です。三組手と呼ばれる三角形の地組みの中に、200 以上とされる図柄の組木を組み上げる技術には、数ミクロン単位を調整できる職人の勘が必要だと言われます。多い時は、数万個の部品により組み上げられますが、見た目は華奢でも、それぞれの部材が精巧に噛み合い、一枚の板のような頑丈さとなります。



・大川組子振興会(大川インテリア振興センター内) TEL : 0944-87-0035

八女すだれ

[やめすだれ／八女郡広川町、八女市]

万葉集にも詠まれた風情ある調度品

すだれは、奈良時代に遣隋使によって伝えられたといわれており、平安時代には、寝殿造りの間仕切りとして欠かせないものでした。八女地方では、明治時代から竹細工用のヒゴが盛んに作られ、それを室内調度品として生産したのが、「八女すだれ」の始まりです。最近では、旅館や店舗等で使用されているほか、一般住宅・寺社仏閣用の高級品として国内外に販売されています。



・八女すだれ振興会 TEL : 0943-32-1141

柳川まり

[やながわまり／柳川市]

女の子の初節句を飾る、愛情のかたち

「柳川まり」は、柳川地域に古くから伝わる、女の子の初節句のひな壇飾りである「さげもん」に欠かせない細工として、現代に受け継がれています。作り方は、糸状の木片を丸めたものに、綿と毛糸で成型し、そこに草木染の木綿糸をそれぞれの柄にそった繊細な比率で巻きつけながら刺繍したものです。現在はカラフルな色彩のリリヤン糸も用いられます。



・柳川まり保存会 TEL : 0944-72-2909

経済産業大臣指定伝統的工芸品

博多織	博多織工業組合 tel:092-409-5162 〒812-0023 福岡市博多区奈良屋町5-10
博多人形	博多人形商工業協同組合 tel:092-291-4114 〒812-0023 福岡市博多区奈良屋町10-3
久留米餅	久留米餅協同組合 tel:0942-44-3701 〒830-0809 久留米市東台川5-8-5
小石原焼	小石原焼陶器協同組合 tel:0946-74-2266 〒838-1601 朝倉郡東峰村小石原730-9
上野焼	上野焼協同組合 tel:0947-28-5864 〒822-1102 田川郡福智町上野2811
八女福島仏壇	八女福島仏壇仏具協同組合 tel:0943-24-3941 〒834-0031 八女市大字本町2-123-2
八女提灯	八女提灯協同組合(八女商工会議所内) tel:0943-22-5161 〒834-0063 八女市大字本村425-22-2

福岡県知事指定特産民工芸品

孫次風	K I T E H O U S Eまごじ tel:093-881-4537 〒804-0082 北九州市戸畑区新池1丁目6-4
小倉織	小倉織協同組合 TEL:093-561-0505 〒803-0814 北九州市小倉北区大手町3-1-107
八朔の馬	筑前芦屋だごびーなとわら馬の会事務局 TEL:093-221-1001 〒807-0133 遠賀郡芦屋町大字芦屋1455-284
芦屋釜	芦屋釜の里 TEL:093-223-5881 〒807-0141 遠賀郡芦屋町大字山鹿1558-3
津屋崎人形	津屋崎人形振興組合 tel:0940-52-0419 〒811-3304 福津市津屋崎3丁目14-3
福岡積層工芸ガラス	(有) マルティグラス tel:0940-34-5370 〒811-3305 福津市宮司3丁目18-2
博多曲物	柴田徳商店 tel:092-651-0470 〒812-0054 福岡市東区馬出2-22-22 博多曲物玉樹 tel:092-935-5056 〒811-2232 糟屋郡志免町別府西2-2-16
博多鉢	高柳商店 tel:092-291-0613 〒812-0039 福岡市博多区冷泉町6-28
博多張子	中尾俊雄商店 tel:092-325-0241 〒819-1601 糸島市二丈深江1268
博多独楽	博多独楽保存会 tel:092-409-4882 〒812-0893 福岡市博多区那珂5-4-8-202
博多おきあげ	清水清子 tel:092-524-4477 〒815-0083 福岡市南区高宮1-3-32
今宿人形	佐藤 由美子 tel:092-863-0824 〒814-0133 福岡市城南区七隈4-12-8
木うそ	太宰府木うそ保存会(太宰府市商工会内) tel:092-922-4345 〒818-0101 太宰府市観世音寺1-2-1

杷木五月節句幟	米山染工場 tel:0946-62-0340 〒838-1511 朝倉市杷木池田267-1
英彦山がらがら	篠崎 嘉丈 tel:0947-85-0169 〒824-0722 田川郡添田町落合1752
棕櫚箒	浮羽棕櫚箒保存会 tel:0943-77-2212 〒839-1402 うきは市浮羽町浮羽301
久留米おきあげ	福岡県商工部観光局 観光政策課 tel:092-643-3454 〒812-8577 福岡市博多区東公園7-7
藍胎漆器	久留米藍胎漆器組合(地場産くるめ内) tel:0942-44-3700 〒839-0809 久留米市東台川5-8-5
城島鬼瓦	城島瓦協同組合(久留米南部商工会内) tel:0942-64-3649 〒830-0112 久留米市三瀬町玉満2779-1
筑後和傘	城島和傘保存会 tel:0942-62-1137 〒830-0202 久留米市城島町下田187-1
鍋島緞通	(有) 鍋島緞通吉島家 tel:0952-24-0778 〒840-0042 佐賀県佐賀市赤松町1-28
八女手漉和紙	八女手漉和紙組合 tel:0943-22-3131 〒834-0031 八女市本町2-123-2
八女石灯ろう	八女石灯ろう協同組合(八女商工会議所内) tel:0943-22-5161 〒834-0063 八女市本村425-22-2
八女竹細工	八女伝統工芸館 tel:0943-22-3131 〒834-0031 八女市本町2-123-2
八女矢	松延矢製作所 tel:0943-22-4501 〒834-0034 八女市高塚706-1
八女和ごま	隈本木工所 tel:0943-22-2955 〒834-0006 八女市吉田1507-3
赤坂人形	野口 紘一 tel:0942-52-4217 〒833-0054 筑後市蔵敷(赤坂)312
きじ車	清水きじ車保存会(みやま市環境経済部商工観光課内) tel:0944-64-1523 〒835-8601 みやま市瀬高町小川15
天然樟脳	内野樟脳 tel:0944-62-2985 〒835-0007 みやま市瀬高町長田1863-1
掛川	福岡県花筵協同組合 tel:0944-32-1010 〒830-0416 三瀬郡大木町八町牟田3
大川総桐箒筒	大川総桐箒筒振興会(大川インテリア振興センター内) tel:0944-87-0035 〒831-0028 大川市大字郷原483-8
大川彫刻	大川ランマ彫刻振興会(大川インテリア振興センター内) tel:0944-87-0035 〒831-0028 大川市大字郷原483-8
大川組子	大川組子振興会(大川インテリア振興センター内) 〒831-0028 大川市大字郷原483-8
柳川まり	柳川まり保存会 tel:0944-72-2909 〒832-0059 柳川市下宮永町168
八女すだれ	八女すだれ振興会 tel:0943-32-1141 〒834-0114 八女郡広川町太田428

展示のご案内

このパンフレットでご紹介した様々な「福岡県の工芸品」。その現物を福岡県庁で実際にご覧いただくことができます。

県庁11階 福岡よかもんひろば

福岡県庁11階の物産観光展示室「福岡よかもんひろば」は、伝統工芸品等の常設展示や触って学べるコーナーに加え、企画展やイベントなども開催しています。北側には、大川インテリアに触れてくつろげるラウンジや、カフェ、ショップも併設しています。博多湾や福岡空港をはじめ、市内の街並みを楽しみながら福岡県の魅力に触れられる物産観光展示室に、ぜひお越しください。

「福岡よかもんひろば」の情報は、

facebookに掲載しています。

(<https://www.facebook.com/fukuokayokamon>)



福岡県庁展望室・物産観光展示室	
所在地	福岡市博多区東公園7-7 福岡県庁11階
お問い合わせ	福岡よかもんひろば tel : 092-645-1835
アクセス	JR吉塚駅(博多駅から1駅)より徒歩約10分 福岡市地下鉄 馬出九大病院前より約5分
利用可能時間	8:30~17:15
休日	土・日・祝日及び年末年始



福岡県の物産観光に関するお問い合わせは

(物産) 公益社団法人 福岡県物産振興会

〒812-8577 福岡市博多区東公園7-7

tel : 092-651-7288 URL : <http://www.bussanfukuoka.jp/>

(観光) 公益社団法人 福岡県観光連盟

〒812-8577 福岡市博多区東公園7-7

tel : 092-645-0019 URL : <http://www.crossroadfukuoka.jp/>





福岡県の
工芸品

CRAFTS in FUKUOKA

福岡県商工部観光局 観光政策課

〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7-7

【TEL】 092-643-3454